

ずいそう



産業開発青年隊から半世紀

石井 嘉一



終戦後しばらくの間、横浜市の桜木町近く関内と呼ばれる辺り一帯は、見渡すかぎり空襲による焼け野原で、ビルの残骸が瓦礫一面の荒野と化していました。

夕方になると瓦礫の間から紫色の煙が、あちこちに立ち上る風景が見られ、地下室だけ残ったビルの一隅を利用して生活を営む人達の居る証でもありました。

桜木町から馬車道方面にかけて運河があり、黒く濁った河の河岸には失業の浮浪者達の群れが、為すこともなくたむろしていました。

日本が敗戦となり外国兵が日本に進駐して来た時は町内会からの伝言で、私達は部屋に籠り窓を閉じ、恐怖に怯えたこともありました。国道一号線を何台も何台も通り過ぎて行くトラックに大勢乗った外国兵の銃を持った姿を好奇心にかられて、恐る恐る見に行った事もありました。



それでも子供心に日本の復興を願い、そのことを夢見て建設省の組織した日本産業開発青年隊中央隊に(財)日本産業開発青年協会のお世話で志願し入所することが出来ました。全国から集まった50名の合格者は二班に分けられ、私達は埼玉県入間郡坂戸町にあった飛行機の格納庫を改築した真新しい宿舎に25名の同期生と共に一年足らずの期間でしたが、合宿生活を体験しました。正式には建設省関東地方建設局産業開発青年隊と呼ばれました。

私達は各々一台ずつの自転車の貸与を受け、日中は主に荒川上流工事事務所に関連した建設工事や機械工場の仕事や測量にとアルバイトや実習を行い、夜は建設省職員の方々の熱心な講義を受けました。隊の綱領は「自立剛健」で自給自足の生活を完遂しました。

付近はサツマイモ畑やスイカ畑が広がり、のどかな田園風景も記憶に残りました。



産業開発青年隊について一寸触れさせていただきますと、昭和26年山形県の青年団によっ

て結成されたのが始まりで、昭和25年に制定された国土総合開発法により全国的な組織として昭和28年に(財)日本産業開発青年協会が、建設・農林両省の共管で設立されました。

昭和37年には「海外協力産業開発青年隊」が発足し、後に外務省主管の青年海外協力隊へと引き継がれました。私達の入所した日本産業開発青年隊中央隊は後に静岡県富士山麓に出来た建設大学校に併合されました。

協会のお世話で横浜市鶴見区市場町にあった「日本開発機製造株式会社」に入社した。「モータ・グレーダ」や「ロッカーショベル」「クローラードリル」「タイヤショベル」などなど様々な建設機械の製造に携わることとなり、今日の会社を興す契機ともなりました。日本開発機製造の前身は長谷川製作所で、戦後は「トレンチャー」の製造から始まり、戦後日本の建設機械製造のパイオニアとして、建設省の発注を始め電源開発のダム工事、東海道新幹線、東名高速道路、山陽新幹線などの工事では特需で繁忙期もあり「日開」(ニッカイ)の名で親しまれていましたが、昭和40年頃三井造船に合併吸収されました。

「日開」時代の思い出では、昭和37年に東北営業所のサービス・エンジニアとなり、役所や鉱山、道路工事、隧道などを巡回しましたが、中でも福島県の滝根碎石採掘現場から鍾乳洞が発見され「あぶくま洞」となったことや、岩手県の田中鉱業土畑鉱業所では湯田ダムの湖底から100m近くの坑道内、狭く、暗く、長く、蒸気で熱い、ヘルメットに灯すカンテラだけが頼りの切羽での機械整備工事指導、また秋田県の同和鉱業花岡鉱業所では当時日本で最初の試みであった28度斜坑をサイドダンプローダでずり出し工事を指導したことなどがあります。

花岡鉱業所も今日では家電製品のリサイクル工場として生まれ変わり、再び注目を集めているようです。



実は青年隊のその後の展開については、もう少し詳しく記すつもりで、産業開発青年隊関係に50年携わっておられた、恩師でもある寺田正明先生を40年ぶりに訪れ、教を乞う事としておりましたが、お会いする日を目前にして11月17日に御歳九十才で他界されてしまいました。

真に産業開発青年隊活動の歴史と共に歩んだ御生涯のように思えます。

——いしい よしかず 社団法人全国建設機械器具リース業協会副会長・東北グレーダー株式会社代表取締役社長——